



妊娠小説の父

3学期制の学校は、間もなく1学期の期末試験1週間前になったりするのだが、2期制の日比谷では、考査ということに関しては、ちょっと余裕のあるのがこの時期である。夏休みに入れば単語のテストもなくなるだろうし、近くは、7月第2週の総合の時間帯に大学を訪問したりするのだから、そういう通学や移動の時間帯に、少し読書をしてみたらどうだろう。

『ちくま評論選』の第一部は考査範囲に指定していないのだが、その中に「アニメのヒロイン像」という斎藤美奈子さんの評論が載っている。「宇宙戦艦ヤマト」や「機動戦士ガンダム」のイラストが掲載されているので、何となく気になっている人も、しっかり読んだ人もいるだろうが、新しい視点を提供してくれる評論である。面白いと興味を感じた人は、ぜひ出典の『紅一点論』（ちくま文庫）を読むことをお勧めする。マンガに関しても、こんな分析がなされているのだということが分かって、大いに勉強になる。（日本のアニメは海外でも大人気だから、留学を考えている人は、友だちを作る際の種本ともなろう）

さて、その斎藤さんのデビュー作が『妊娠小説』（ちくま文庫）である。ちょっと変わったタイトルだが、小説ではなくて評論である。『紅一点論』と同じような読みやすい文章で、近代文学の名作と言われる作品を、これまた新しい視点で分析してくれておりとても面白い。

そもそも「妊娠小説」とは何か。斎藤さんの定義をそのまま引用すると、

「妊娠小説」とは「望まない妊娠」を登

載した小説のことである。
ということになり、

日本の近現代文学には、「病氣小説」や「貧乏小説」とならんで「妊娠小説」という伝統的なジャンルがあります。

結核の治療法が発見されて「病氣小説」が急速にすたれ、赤貧の駆除が進んで「貧乏小説」もいつのまにか姿を消してしまいましたが、幸いまだこれといった特効薬のない「妊娠小説」は、今日もなお、文学業界の現役として第一線で活躍しています。となるのである。この部分を読んだだけでもスパイスの効いた独特の表現におもしろみを感じる人がいるはずである。

さて、この本で「妊娠小説の父」に認定されているのが『舞姫』なのである。斎藤さんは、『舞姫』をこの「妊娠小説」という視点から見事に分析しており、その分析のメスの切れ味はきわめて爽快である。時間があれば授業の中でも紹介したいが、夏休み明けに期末考査もあることだし、ぜひ夏休み中に読んでみることを勧めたい。

ちなみに、島崎藤村『新生』、石原慎太郎『太陽の季節』、大江健三郎『われらの時代』、柴田翔『されど、われらが日々』、見延典子『もう頬づえはつかない』、中沢けい『海を感じる時』、村上春樹『風の歌を聴け』、橋本治『桃尻娘』、村上龍『テニスボーイの憂鬱』、辻仁成『クラウディ』などといった名作も斎藤さんのメスによって切り刻まれており、それらの作品に関する知識を蓄えながら、文学の楽しさを味わうことができるだろう。